

第十五章 滿洲事變ト國際聯盟 (七)

杉村「ドラモンド」案

昭和八年一月十二日豫定ニ從ヒ我々ハ再ビ壽府ニ集マツタ。舊臘休會以來杉村公使ハ「ドラモンド」事務總長ト絶エズ接觸シテ交渉ヲ續ケ、一案ヲ作ツテ居タカラ、我々ハ直チニ之ガ研究ヲ始メタ。此新案ハ當時俗ニ「杉村、ドラモンド案」ト呼バレタモノデアルガ「ド」氏ハ此名稱ヲ頗ル迷惑ガツテ居タ。ソレハ十二月十八日ニ氏ガ獨斷デ前ニ書イタ様ナ修正ヲ受諾シタコトガ、相當小國側ノ感情ヲ害シ、此方面カラ、非難ヲ受ケタカラ、今又氏ガ日本ノ代辯者タルヲ何人モ疑ハヌ杉村聯盟事務局次長ト協議シテ、新案ヲ作ツタト云フコトニ成レバ、小國側ハ益々憤慨スベク、事務總長ガ之ヲ氣ニスルノハ無理モ無イ様ニ見エルガ、十二月休會ノ際十九人委員會ハ、一月十六日再會ノ時迄ニ議長及事務總長ガ日支双方ト折衝シテ妥協案ヲ作ル様此兩氏ニ委囑シタノデアルカラ、斯クノ如キ遠慮ハ全ク不必要ナルニ鑑ミ、若シ惡ク氣ヲ廻ハセバ、氏ノ同意シタ新案ガ後日不測ノ難關ニ逢着シタ時、責任回避ノ餘地ヲ存スル爲メノ用意デアツタカモ知レヌ、或ハ又此前提ノ下ニ氏ハ杉村公使ノ要求ヲ或程度迄呑クニシタノカモ知レヌ、又何レニセヨ我々ハ新案ヲ杉村「ドラモンド」兩氏ノ合作ト心得、此基礎ノ下ニ決議案及理由書ノ再檢討ヲ開始シタ、新案ノ概貌ハ左ノ通りデアル。

決議案 其一

一、原案第一項ニ同ジ。

二、原案第二項ニ同ジ。

三、調査委員會報告書第九章ニ掲ゲラレタル諸原則ハ、斯クノ如キ解決ヲ爲スニ有益ナル基礎ヲ構成スルモノナルコトヲ考慮シ。

四、右諸原則ガ極東ニ於ケル事態ノ進展ニ如何ニ適用セラレ得ベキヤヲ決定スルハ、世界平和ノ最高ノ關心ニ依リ總會ノナスベキモノナルコトヲ考慮シ。

五、右解決ノ實際的工作ノ爲メ、十九人特別委員會ハ其委員中ヨリ、兩當事國間ノ懸案ヲ最終且ツ根本的ニ解決スル様兩當事國ヲ援助スルノ任務ヲ有スル、小委員會ヲ任命スベキコトヲ決議ス。

六、第二案第六項ノ次ニ左記ヲ加フ。

就中其事業ニ參加セシムル爲メ、他ノ聯盟國又ハ非聯盟國ノ代表者ヲ招請スルノ權能ヲ賦與ス。

七、第二案第七項ニ同ジ。

八、原案第九項末尾「委員會」ハ以下ヲ左ノ如ク改ム。

委員會ハ第十五條第三項ニ依リ、總會ヨリ委囑サレタル其最終報告ヲ總會ニ提出スルト同時ニ、本件ニ關スル提案ヲ爲スベシ。

九、原案第十項ニ同ジ。

決議案 其二

原案「其報告ガ」以下ヲ左ノ如ク改ム。

其報告ガ平和維持ニ關スル聯盟ノ努力ニ至高ノ貢獻ヲ爲セルコトヲ宣言ス。

理 由 書

- 一、原案第一項ニ同ジ。
- 二、原案第二項ヨリ「一切ノ」及「蓋シ」以下ヲ削ル。
- 三、原案第三項末段「若シ失敗ニ終ル時ハ」以下ヲ削ル。
- 四、原案第四項末尾「和協ヲ目的トスル提案」ヲ「紛爭解決ヲ目的トスル提案」ニ改ム。
- 五、原案第五項「他方米合衆國」以下ヲ削ル。
- 六、右解決ノ實際的工作ノ爲メ、特別委員會ハ其委員中ヨリ、兩當事國ノ懸案ヲ最終且ツ根本的ニ解決スル様兩當事國ヲ援助スルノ任務ヲ有スル、小委員會ヲ任命センコトヲ提議シ、且ツ此小委員會ハ其事業ニ參加セシムル爲メ、他ノ聯盟國又ハ非聯盟國ノ代表者ヲ招請シ得ルコトヲ提議シタリ。
- 七、原案第七項冒頭「交渉委員會」ヲ「小委員會」ニ改メ「専門家ノ意見ヲ徵」ノ次ニシ「其機務ヲ利用」ヲ加ヘ「又必要」以下ヲ削ル。
- 八、小委員會ノ委員ハ、法的關係ニ付テハ、一九三二年三月十一日ノ總會決議ノ諸原則ヲ、又事實關係ニ付テハ、兩當事國意見書審査ノ後、調査委員會報告書最初ノ八章、並ニ同報告書第九章初頭ノ叙述ヲ指針トスベク、次デ考慮セラルベキ解決ニ關シテハ、調査委員會報告書第九章記載ノ諸原則ニ遵ヒ、之ヲ求ム

ベキモノトス。

九、十九人特別委員會ノ報告ハ總會ニ提出セラルベク、總會ハ其適當ト認ムル決定ヲ爲スモノトス。尙委員會ハ紛爭ノ解決ヲ更ニ困難ナラシムルガ如キコトナカラシムル爲メ、如何ナル聯盟國ト雖モ報告書第九章ニ掲ゲラレタル諸原則及三月十一日ノ總會決議ニ合致セザル措置ヲ執ラザルコトヲ、固ク期待スルモノニシテ、余ハ總會モ之ト同意見ナルコトヲ確信ス。

錯覺ノ競合

杉村公使ハ更ニ「ドラモンド」事務總長トノ協議ヲ續ケ、一月十三日前記理由書第八項「意見書審査ノ後」ヲ「意見書ヲ考慮ニ容レ」ニ改メ「並ニ同報告書第九章初頭ノ叙述」ヲ削リ「解決ニ關シテハ」ノ次ニ「決議第三項及第四項ニ表示セラレシ如ク」ヲ加ヘ、又理由書第九項「報告書第九章」ヲ「國際聯盟規約、巴里不戰條約、九國條約」ニ改メタガ、事務總長ハ杉村公使ニ對シ、最早此以上讓歩ノ餘地ハ無イト思フカラ、新案全體ニ對シテ諾否ノ回答ヲ得タイ、ソシテ新案ハ兩人ノ合作トセズニ、日本案トシテ公式ニ提出サレル様ニシタイト告ゲタ。思フニ「ド」氏ハ新案ニ對シテ或ハ英國側ノ同意ハ取付ケタカモ知レヌガ、十九人委員會ヲ承服サセル確信ハ無カツタノデアラウ、又自分ガ是レ程立入ツテ「コムミット」シタトナルト、小國側ノ非難攻撃ガ非常ニ高マルノヲ恐レタ爲メデアラウガ、最初カラ我々ノ懸念シテ居タ様ニ、氏ハ果シテ大詰ニ臨ンデ逃ゲヲ打ツタ。何レニセヨ當時筆者ハ壽府デ冷靜ニ四圍ノ狀況ヲ考察シテ苦笑ヲ禁ジ得ナカツタ

ノデアアルガ、日本デハ「聯盟ハ結局我方ノ主張スルガ如ク日支直接交渉邊ニ落チ着クノ外ナキヲ是認シツツモ、面目問題等ニ因ハレ中々讓歩セザルベキヤニ認メラルル」モ「今ヤ聯盟ハ何トカ其面目ヲ立テツツ、事實上日支事件ヨリ手ヲ引カムトスル傾向ニアリト見ルベク」支那側ニテモ滿洲問題ハ最早致方ナシト見切リヲ附ケ、右見切りノ下ニ日支直接交渉ヲ開始スル等ノ方針ヲ執ル外ナシトスルノ氣運漸ク動キ初メ」タトノ前提カラ、新案ハ「決議案及理由書共ニ著シク改善」サレタガ「今一押ノ所ト存ス」ト累次ノ電報中ニ記載シ、相當樂觀氣分ヲ持ツテ居ル様ニ見受ケタ。我々ノ打ツタ電報ヲ細カニ玩味シテ吳レタラ、斯クノ如キ錯覺ハ起ラヌ筈デアアルガ、支那側デハ日本ニ向ツテハ直接交渉敢テ辭セズトノ口吻ヲ漏シナガラ、聯盟ニ對シテハ直接交渉絕對反對ノ態度ヲ執リ、慣用ノ二重政策ニ出デテ居ル。支那代表部ハ今迄口頭デ聯盟ニ意見ヲ通告シテ居タノデアアルガ、一月十六日十九人委員會議長宛公文デ修正意見ヲ送ルト同時ニ、原案ニ變更ヲ加ヘラレタトノコトダガ、未ダ其通知ニ接セヌ、傳聞スルガ如クバ右ハ支那ニ對シテ明カニ衡平ヲ缺クモノデ、和協ヲ不可能ナラシムルト考ヘルカラ、速カニ真相ノ通告ヲ得タイト申入レタ。右ニ對シ「イマンス」議長ハ當日開カレタ十九人委員會ノ「コムミュニケ」寫ヲ送ルニ止メタガ、此「コムミュニケ」ノ要點ハ十二月二十日以來議長及事務總長ト兩當事國トノ間ニ交渉ハ行ハレタガ、今迄ニ受取ツタ新提案ハ支那カラノ丈ケデ、日本側ハ目下請訓中故四十八時間ノ猶豫ヲ希望シ、十九人委員會ハ之ヲ承諾シタト云フノデアアル支那側ノ修正ハ十二月十五日原案決議其ノ第四項及第九項並ニ理由書第九項ニ關スル三點丈ケデ、左ノ通りデアアル。

決議案其ノ第四項 調查委員會報告書最初ノ八章ニ掲ゲラレタル緊要ナル諸事實ノ指針ニ基キ、且ツ一九三二年三月十一日ノ總會決議及前顯報告書第九章ニ掲ゲラレタル諸原則ヲ基礎トシ、殊ニ滿洲ニ於ケル現制度ノ維持及承認ハ解決ト看做サレ能ハザルコトニ留意シ、當事國ト協力シテ(以下原案ニ同ジ)同第九項末尾「提案ヲ爲スベシ」ヲ左ノ如ク改ム。

又ハ十九人特別委員會ハ、規約第十五條第四項ノ規定スル報告ヲ爲ス必要アラバ、此報告ノ日ヨリ一箇月ヲ超エザル期間内ニ、總會ニ對シテ提案ヲ爲スベシ。

理由書第九項「環境ニ於テハ」ノ次ニ「支那ノ主權並ニ領土的及行政的保全ヲ完全ニ尊重シツツ」ヲ、又「九月前ノ」ノ次ニ「事實上ノ」ヲ加フ。

即チ支那側ノ修正ハ和協委員會ニ關シ我方ノ主張ト正反對ニ、其權限ヲ強化セントスルモノデアアルカラ、聯盟ハ板缺ミノ形チデ身動キガ出來ヌ、支那ガ頑張ル限り之ヲ抑ヘ付ケル方法ハナイシ、又小國連ニ此様な氣分ハ毛頭無いノデアアルカラ、日本デハ「今一押」ト考ヘテ居ルガ、實際ノ動キハ決シテ斯クノ如キ樂觀ヲ許サヌ、最モ都合ノ惡カツタコトハ、調查團ト分レテ日本ニ立寄り、遲レテ壽府ニ歸ツタ「ハース」氏ノ進言デアアル、氏ハ事件ノ頭初日本ニ來テ、之ハ決シテ國民ノ輿論デハナク單ニ軍部ノ工作ニ過ギヌ、又軍部デハ更ニ放膽ナ計畫ヲ立テテ居ルト報告シ、聯盟ヲ誤ラシテ今日アラシメタ人デアアルガ、今度モ亦日本ノ重臣乃至憂國ノ爲政家ハ決シテ聯盟トノ絶縁ヲ好ンデハ居ラヌト報告シタノデ、聯盟側ハ日本ノ見方ト正反對ニ今一押スレバ日本側ガ折レテ來ルトノ考ヲ抱クニ至ツタ、「ハース」氏ノ報告ガ正鵠ヲ得テ居タカ否カハ別問題ト

シテ、十二月十七日我々ノ受取ツタ來電中ニ「萬一右主要修正ニ應ゼシテ總會ニ臨ムノ意嚮ナルニ於テハ我々トシテハ反對投票ヲ行フニ至ルベキコトヲ説明セラレタク、將又代表部ノ引揚又ハ脱退ノ如キハ、我方ニ於テ右ノ如ク反對投票ノ段階ヲ經、ソノ他アラユル努力ヲ傾倒スルモ、然モ尙ホ聯盟側ガ反省セザル時ニ於テ、始メテ問題トナル次第」ナリト書イテアリ、又一月十七日ノ來電ニ於テサヘ「未ダ輕々ニ脱退又ハ引揚等ヲ問題トスベキ時機ニ非ズ」ト述べ居ル所カラ按ズレバ、日本當局ノ腹ハ當時未ダ極マツテ居ラナカツタシ、「ハース」氏ノ來朝シタ時聯盟脱退ニ不同意ヲ唱ヘテ居タ重臣連モ少ナク無カツタ模様ダ。此國論ノ不統一ハ確カニ聯盟ノ空氣ヲ強化サセタ一元素デアルガ、大局カラ考察スレバ聯盟モ亦日本モ、孫子ノ所謂敵ヲ知ラズ己ヲ知ラズニ戰ツタ爲メ、双方共ニ百戰百敗ニ終ツタ、若シ帝國政府ガ早キニ及ンデ我々ノ進言ニ耳ヲ籍スノ英斷ガアツタラ、事態ハ全然異ツタ進展ヲ遂ゲタコトト、返ス返スモ遺憾千萬デアル。

十九人委員會ト新案

前掲一月十六日十九人委員會ノ「コムミュニケー」ヲ讀ンデ我々ノ神經ヲ極端ニ刺戟シタモノハ、杉村公使ガ事務總長ト協議シテ作ツタ新案ハ勿論、十二月十七日起草委員會ノ同意シタ修正案迄モ、十九人委員會ガ全然無視スル態度ニ出デタコトデ、之ハ事務總長橫暴ノ聲ガ勢ヲ得タ爲メカ、或ハ支那側ガ少シモ折レヌノデ、手ヲ燒イタ結果カ、乃至ハ平津方面ノ工作及熱河討伐ニ興奮シタノニ依ルカ、多分此三者綜合ノ結果デアラウガ、此空氣カラ推斷スルト、新案ハ云フ迄モナク、十二月十七日ノ起草委員會修正案デモ、十九人委

員會ヲ承服サセルコトノ容易デナイノヲ痛感シタカラ、我々ハ直ニ内田外相ニ電報シテ、帝國ガ聯盟脱退ノ覺悟デ進ムナラ別問題デアルガ、若シ左様デナイナラ、新案ヲ鵜呑ニスル外妥結ニ達スル光明ノ無イコトヲ率直ニ云ヒ送ツタ。東京デハ事務總長ガ杉村公使ニ對シテ新案全體ニ付賛否ノ回答ヲ要求シタコトヲ非常ニ憤慨シテ居ルガ、感情問題ヲ離レテ冷靜ニ考察スルニ、若シ帝國政府ガ新案ヲ其儘然諾シタラ、事務總長ハ十九人委員會ニ之ヲ承認サセル全責任ヲ帝國ニ對シテ負フコトナルデアルカラ、帝國ノ立場ガ頗ル有利ニ向轉スルノハ明瞭デアル。然ラバ新案ヲ鵜呑ニスル爲メノ障害ハ何デアルカ、云フ迄モナク米蘇招請問題デ、我々モ能ク之ヲ了解シ、政府從來ノ主張ト態度ニ共鳴シテハ居ルガ、如何ニセン政府ニ未ダ最後ノ腹ガ極マツテ居ラズ、徒ラニ聲ノミデ「今一押」ト云フテモ、前記ノ如ク周圍ノ環境ハ到底我方ノ要求ヲ受入レンウニハ見エヌ。東京デハ「ベネシユ」「サイモン」兩外相ノ話ニ非常ナ重キヲ置イテ居ルガ、之ハ我方ノ主張ヲ積極的ニ支持スルト云フノデハナイ、ソシテ山海關事件以來英國ノ態度ガ變化シタ、ハ、出淵大使ニ「カツスル」國務次官ガ述べタ通りデ、殊ニ妥結ニ達スル爲メニハ支那側ノ同意ヲ得ネバナラヌガ、之ニハ米蘇招請ノ餌ヲ與ヘル外、他ニ手段ノナイ現狀デアルカラ、我々ハ決裂カ米蘇招請承認カニ途何レカラ選バネバナラス羽目ニアルモノト判斷シタ。而シテ新案デ和協委員會ノ權限ニ大ナル變更ノ加ヘラレタ今日、米國ノ參加ニ從來ト同様ノ重要性ヲ置ク必要ハナイト思ハレルシ、又此招請問題ハ英國ノ提言ニ出發シテ居ルノデアルカラ、和協委員會其他デ事務總長ガ帝國ニ與ヘタ讓歩ニ「レシブロケート」スル爲メ、帝國モ亦英國ノ顔ヲ立テル宏量ヲ有スベキダト考ヘ、此事モ委細電報シタノデアルガ、東京デハ我々ノ意見ヲ一蹴シ、依然

トシテ決議案其ノ第六項末段「就中」以下及之ニ照應スル理由書第六項「且ツ」以下ノ削除、即チ米蘇ノ不招請ヲ要求スルト共ニ、交渉ガ今ノ段取ト成ツタ際ニ爲スノハ寧ロ滑稽ニ類スル、決議案其ノ第三項「基礎ヲ構成スル constituent la base」ヲ presentent une base ニ、又同第四項「如何ニ」ヲ「如何ナル程度ニ」改メンコトヲ要求シテ來タ。我々ハ非常ナ失望ヲ以テ此電報ヲ讀ンダガ、聞ケバ内田外相ハ米國ノ參加拒絕ヲ閣員ニ「コミット」シ、爲メニ自繩自縛ニ陥ツテ居タノダソウデ、我々モ已ムヲ得スコトト諦メ、本省ノ注文通り新案ヲ訂正シ、一月十八日「イマンス」議長ニ送ツタガ、同議長ガ新案ノ相談ニ參與シタ事實ハ之ヲ見落シテハナラヌ、夫レ故事務總長ハ新案ヲ日本案トシテ出ス様會テ杉村公使ニ希望シタガ、我々ハ事實其儘ヲ送附狀ニ記載スベキダト考ヘ、其冒頭ニ「決議案及理由書ハ去十二月以來一方閣下及事務總長、他方日本代表部トノ間ニ行ハレシ非公式會議ニ於テ調整セラレタルニ依リ、余ハ今帝國政府ノ受諾シ得ベキ案文ヲ閣下ニ送附ス」ト書イタ所、之ヲ内見シタ事務總長ハ、餘リニ自分等ガ拘束サレ過ギルト泣ヲ入レタカラ、從來ノ友誼ニ對スル禮讓トシテ行文ヲ緩和シ、「閣下ノ了知セラルル如ク、十二月十五日特別委員會ノ名ニ於テ閣下ヨリ余ニ交附セラレ決議案及理由書ニ關シ、去十二月以來閣下、事務總長及日本代表部間ニ、非公式會議ヲ行ヘリ。余ハ今帝國政府ノ受諾シ得ベキ案文ヲ、閣下ニ送附スルノ光榮ヲ有ス」ト認メ、此手紙ニ添ヘテ新案ヲ届ケタ。

松岡代表ハ一月十七日「イマンス」議長及「サイモン」外相ヲ訪問シテ、米國招請問題ニ關スル帝國政府ノ主張ヲ詳細説明シタガ、十八日新案ヲ送ルト間モナク事務總長ニ面會シテ、本問題ニ關シ同様ノ説明ヲシタ。

此時事務總長ハ日本側ノ修正案要求中重要ナモノガ四ツアツタガ、其内ノ三點ハ既ニ讓歩シ、殘ルハ只米國招請ノ一點丈ケダ、若シ之ヲモ讓レバ日本ハ全部満足ヲ得ルコトナル譯ケデ、自分ハ頗ル困難ナ立場ニ置カレルダロウト述懐シタトノコトダ、(此時ノ會見録事務總長側ノハ、前記ト非常ニ異ツテ居ル、筆者ガ松岡代表ノ手記ニ據ツタノハ云フ迄モ無イ)當時壽府デハ我代表部ノ態度ガ日本政府ノ方針ト一致シテ居ラヌトノ評判ガ相當ニアツタ、松岡代表ノ強硬振ハ決シテ政府ノ意思デハ無イト云フノガ其聲デアル。之ハ思フニ「ハース」氏ヲ中心トスル聯盟人ノ宣傳デアロウガ、實際ノ所讓歩ノ必要ヲ進言シタノハ代表部デ、之ヲ蹴ツタノハ政府デアルカラ、下馬評程當テニナラヌモノハナイ。ソシテ東京デハ如何ナル錯覺ニ依ルモノカ、石井子爵ヲ歐洲ニ來遊サセル考案ヲ立テ、子爵ハ一月九日出發ノ筈ダトノ情報ニ接シタ。子爵ハ在佛大使トシテ長年聯盟ニ關係シ、假令御世辭ダトシテモ壽府デノ評判ハ相當良イカラ、政府ハ子爵ニ依テ難局ヲ打破シ得ルト考ヘ、子爵亦自惚ガアツタノカモ知レヌ、然シ日本ニ歩ミ寄ル意思ノ無イ限り、何人ガ局ニ當ツテモ妥結ハ絶對ニ不可能デ、殊ニ此機微ノ時期ニ餘計ナ顔出シヲサレテハ、衆望ヲ負フテ特派サレタ松岡代表ノ面目ハ九潰レダ、氏ガ強硬ニ抗議シタノハ當然デ、政府モ終ニ之ニ聽イタガ、夫レヲ殘念ガツタ同僚代表ノアツタノニハ、只驚クノ外ナカツタ。

十九人委員會ノ最後通牒

十九人委員會ハ我方カラ提案ヲ受理シタ一月十八日、直チニ會合シテ此案ヲ審議シ、會議後左記要領ノ「コ

ムミニケ―」ヲ發表シタ。

日本提案ハ根本問題ニ付、十九人委員會ノ可決シ兩當事國ニ送レル原案ト、相違スル點數多アリ。日本政府ノ反對スル要目中ノ一ハ、紛争ノ解決ヲ目的トスル委員會ニ、非聯盟國ノ代表者ヲ加フルコトニアリ。十九人委員會ハ若シ此反對ガ原案ニ對スル唯一ノモノナルニ於テハ、兩當事國ノ意見ヲ徴シタル上、本問題ヲ解決スルコト不可能ナラザルベシト考フ、故ニ此難關ヲ突破シ得ル場合、日本ニ原案承諾ノ用意アリヤ否ヤヲ知ル爲メ、情報ヲ得ルノ必要ヲ認ム。

十九人委員會ハ本件ニ關シ日本代表部ト接觸スル様、議長及事務總長ニ委囑シタリ。

十九人委員會ハ支那代表部ト會談ニ入ル前、先ヅ日本代表部ノ回答ヲ得ルヲ要スト思考ス。

此「コムミュケー」デ十九人委員會ノ空氣ハ最早明カデアル、米蘇招請問題ハ云フ迄モナイガ、和協委員會ノ權限其他ニ關シテ、日本ガ原案ニ爲シタ反對ハ、十九人委員會ノ熟知スル所ダカラ、同委員會一月十八日ノ決定ハ、明カニ日本ニ對シテ横車ヲ押ス挑戦デアル。殊ニ「ドラモンド」事務總長ガ實際自分ノ手掛ケタ案ヲ少シモ支持セスノミカ、全ク無關心ノ態度デ、十九人委員會ガ之ヲ日本案ト呼ブニ任セ、會議中何等發言シナカツタト聞イタ時、假令米蘇招請問題ニ纏ハル不平ハアルニセヨ、餘リノ仕打ト我々ハ頗ル心外ニ感ジタノデ、即日松岡代表ハ議長及事務總長ト會見シ、翌十九日我々ハ左記二通ノ手紙ヲ送ツタ。

筆者ヨリ「イマンス」議長宛公文

有リ得ベキ一切ノ混淆乃至誤解ヲ避ケンコトヲ希望シ、日本代表部ハ決議案及理由書ニ關シテ今日迄行ハ

レシ交渉ノ進行ヲ明確ニスルヲ要スト認ム。

日本代表部ハ去十二月十五日十九人特別委員會ノ作成セル決議案及理由書ノ送附ヲ閣下ヨリ受ケタルニ付日本國政府ノ要求スル修正ヲ十二月十七日閣下及起草委員會ノ各員ニ通告セリ、余ハ此修正案ガ閣下ヨリ既ニ十九人委員會ニ通達セラレシモノト思考スルモ、何等カノ必要アルヲ慮カリ、其寫ヲ本書翰ノ附屬トシテ送附ス。

十九人委員會ノ諸員ハ間モナク壽府ヲ去レルニ付、閣下及事務總長ハ妥結ニ達シ得ベキ基礎ヲ探求スル爲メ、日本代表部トノ接觸ヲ絶タザル様委囑セラレタリ。

此非公式交渉ハ十九人委員會ノ原案ヲ基礎トシ、日本國政府ノ前記修正案ヲ考慮ニ加ヘ、一月四日以来壽府ニ於テ行ハレ、其結果日本代表部ハ本書翰ニ寫ヲ添附スル決議及議長宣言ノ新案ヲ一月十三日日本國政府ニ進達セリ。

此新案ニ對スル日本國政府ノ見解ニ接セル日本代表部ハ、政府ノ要求スル修正ヲ加ヘシ案文ヲ、一月十八日附書翰ヲ以テ閣下ニ送附シタリ。

此修正ハ決議案其一二付テハ左ノ三點トス、即チ第三項 *constituent la base de presententune base* ニ、第四項「如何ニ」ヲ「如何ナル程度」ニ改メ、第六項「就中」以下ヲ削除セントスルモノニテ、決議新案其二ハ之ヲ承諾ス。議長宣言ニ付テハ、第二項 *les elements de des elements* ニ改メ、第六項非聯盟國ノ參加ニ關スル部分ヲ削ランコトヲ提議セルモノナリ。

余ハ附屬書ト共ニ本書翰ヲ十九人特別委員會各員ニ知照センコトヲ閣下ニ請ヒ、此機會ニ閣下ニ向ツテ重
ネテ敬意ヲ表ス。

松岡代表ヨリ「ドラモンド」事務總長宛

私 信

昨日「イマンス」閣下、貴臺及余ト會見ノ際ニ於ケル余ノ諒解ニ關シ。本日杉村氏ガ貴臺ト爲セル會話ニ
付我々ニ語ル所、換言スレバ若シ日本國政府ニシテ貴臺ノ要請ニヨリ東京ニ電報セル新決議案及議長宣言
案ニ同意ト決定セバ、十九人委員會モ亦之ニ同意スベキヤトノ件ハ、余ヲ驚愕セシメタリ。

何レニセヨ貴臺ガ本日杉村氏トノ會話中引用セラレシ余ノ陳述ニ、貴臺又ハ「イマンス」氏ハ反對スベキ
モノト思ヒ居ラルル印象ヲ、余ハ昨日ノ會談其他ニ於テ了得セリ。余ノ引用シツアル陳述トハ、何如ナ
ル責任ヲモ負ヒ能ハザルガ余個人トシテハ、非聯盟國招請ノ件ヲ削ルコトニ依リテ去十二月十五日ノ案ニ
同意スルヨリ、新案ヲ受諾スル方、我政府ニ取り容易ナルベシト考フト云フニアリ。貴臺ノ知ラルル如ク
「イマンス」議長及貴臺ハ若シ我政府ニシテ新案ヲ受諾スルニ於テハ、之ヲ承認セシムル爲メ十九人委員
會ヲ説得スルニ最善ヲ盡スベシト約サレタリ。右ニ關聯シテ貴臺ハ新案ニ對スル總括的賛否ヲ欲セラレ、
之ヲ我政府ニ電報スル様我々ニ要求サレシコトヲ記憶セラルベシ、貴方ニ自縛ノ意ナクバ、斯クノ如キ要
求ハ意義ヲ有セズ又意義ヲ有シ能ハズ。

余ハ昨日送附狀ニ添ヘテ「イマンス」議長ニ送レル案ガ、十九人委員會ニ於テ「日本案」ト呼バレシト聞

キ少ナカラズ驚ケリ 十九人委員會ニ於ケル委員ノ多數ガ、誤解ノ下ニ其結果タル思想ノ混淆ヲ以テ力説
シツアルハ、之ヲ奇異トセズ。余ハ草案ガ「日本案」ト稱セラレ能ハヌコトニ關シ、貴臺ノ記憶ヲ喚起
スルヲ殆ンド無用ト認ム。余ノ送附狀ハ貴臺ト協議ノ結果、我々ノ意ニハ滿タザリシモ、貴臺ノ蒙ラルル
コトアルベキ迷惑ヲ避クル爲メ、廣汎ナル文體ヲ使用セリ。我々ノ此諒解アル態度ハ賞玩セラレ、議長及
貴臺ハ必ズヤ余ノ公文ニ附屬セル案文ノ本體、貴臺ト杉村氏及日本代表部トノ間ニ、長キ且ツ困難ナル商
議交渉ヲ經テ作成セラレ、其結果我政府ニ稟申スルコトト成レル案文ノ實在ニ付、十九人委員會ニ通報セ
ラルベキコトヲ少ナクモ期待セリ。日本國政府ガ最近要求セシ修正ハ此新案ニ對スルモノナリ、故ニ十九
人委員會ニ東京へ稟申セル此新案ノ提示ナキニ於テハ、少ナクモ前記本體ノ概要説明ナキニ於テハ、全部
不可解ニ終ルハ勿論ノ義ナリ。

余ハ本月十二日以来ノ交渉ハ、十九人委員會ノ委囑ニ依リ貴臺之ヲ行ヘルモノト、了解シ居ルコトヲ此機
會ニ附言セントス。

以上ニ依リ貴臺ハ昨日ノ會談ニ於ケル余ノ了解ガ、全ク自然ニシテ且ツ當然ノ事理タルコトヲ諒承セラル
ベシ。

余ハ商議現在ノ段階ニ於テ、貴臺及「イマンス」議長ニ以上ヲ卒直ニ披瀝スルヲ最善ト信ジ、之ヲ爲セル
モノニテ、同一ノ精神ニ則リ本書翰ガ繕讀セラルベキヲ確信ス。

以上ノ書翰ヲ送ルト同時ニ、我々ハ其責任ヲ以テ新ナル案文ヲ作り、之ヲ議長ニ提出シタ、此案ハ非聯盟國

ノ招請ニ關スル部分ヲ削除シタ外、杉村「ドラモンド」案ヲ鵜呑ニシタノミナラズ、一月十八日會談ノ時事務總長ガ松岡代表ニ重要性ヲ述べタ十二月十五日ノ決議原案第三項全部ヲ、其儘新案第三項ノ終リニ追加シタモノデアルガ、議長ハ二十日ノ十九人委員會ニ筆者ノ書翰及此新規提案ヲ配布スルト共ニ、同案ハ未ダ日本國政府ノ承認ヲ得タルモノニ非ズシテ、代表部ガ其責任ヲ以テ提出セルモノダト附ケ加ヘタ。十九人委員會ハ十八日ノ質問ニ對スル日本國政府ノ回答ヲ待チツツアル現狀ダカラ、其回答以前ニ新ナル提案ヲ審議スルコトハ出來ヌト云フニ決シタトノコトデアルガ、事務總長ハ一月二十日附デ松岡代表ニ左ノ回答ヲ送ツタ。或種ノ誤解存スルタ如ク思ハルルニ付、單簡ニ事態ヲ再檢討セント欲ス。

十九人委員會ガ十二月ニ休會セル時、議長及余ハ代表部ト既ニ開始セラレシ會話ヲ繼續スル様、訓令セラレタリ。之ガ爲メ一月早々余ハ休暇ヨリ歸リタルガ、日本代表部ノ何人モ壽府ニ居ラザリキ。

他方余ガ從來會談シ、又余ノ同意ニ依リ余ト交渉ヲ繼續スルコトヲ貴臺ヨリ認許セラレタル杉村氏ハ、事態ヲ考察ノ上、日本國政府及十九人委員會ガ承諾シ得ベシト思ハルル一案ヲ作成シタリ。

我々ハ長時間意見ヲ交換セルガ、杉村氏ハ代表部ニ諮問シ、結局該案ハ著シク變更セラレタリ。斯クシテ決定サレタル案ヲ、杉村氏ハ代表部ノ議ニ附シ、代表部ハ之ヲ東京ニ電報スルニ決シタリ。余ハ之ヲ電報スル様要求セルコトナク、本件ハ代表部ノ一存ニテ決定セルモノナリ。

若シ日本國政府ガ原案類似ノ何物ヲモ承諾シ能ハザルニ於テハ、妥協ノ基礎トシテ余ハ個人的ニ新案ヲ推奨スルモ、余ノ關スル限リ余ノ見解ヲ以テスレバ、新案ハ十九人委員會ガ承諾可能ト考ヘ得ル絶對的最少

限ナルベキコト、及余ハ斯カル承諾ヲ毫モ保障スル能ハズ、實際之ヲ得ルコト困難ナルベシト考フルコトヲ明確ニ開示シタリ。

余ハ代表部ガ東京ニ此提案ヲ電報スルニ決セルコトヲ聞ケリ（杉村氏ハ本案ヲ要スレバ氏自身ノ案トシテ政府ニ提議センコトヲ要求セリト余ニ語リタリ）筆者註——、杉村公使ヨリ斯クノ如キ提言アリシヲ記憶セズ——余ハ此案ヲ絶對的最少限ナリト思考シ、如何ナル變更モ此案ヲ無價值ニ終ラシムベシト感得セル故、回答ハ賛否孰レカナラザル可ラズト告ゲタリ。

杉村氏ハ日本國政府ノ受諾可能ト思ハル範圍内ニテ、十九人委員會ノ最モ承諾シ得ベキモノニ付、余ノ考ヲ聞キタリ。余ハ勿論之ニ關シ余ノ出來得ル總ベテノ援助ヲ與ヘタイ。然レドモ若シ余ガ余自身ノ提案ヲ爲スベキ様要請セラレシニ於テハ、余ハ余ノ全權限ハ十九人委員會ノ原案ヲ日本代表部ノ審議ニ附スルニアリ、而シテ如何ナル程度迄該案ヲ承諾シ得ルヤノ決定ハ日本代表部之ヲ爲スベキモノナリ、ト答ヘシナルベシ。故ニ余ハ新案ガ余ト協議ノ上作成セラレシト云フニ同意スルモ、新案ハ明確ニ日本案ナリ。

去ル十四日議長來壽スルヤ、余ハ事態ヲ報告セリ、然レドモ新案ニ對スル氏ノ見解ハ余之ヲ知ラズ。（筆者註議長ハ新決議案其ニ同意ヲ表明セリト傳聞ス）

十六日余ハ余ト協議セル日本代表ガ東京ニ提案ヲ電報シ、其回答ヲ待チツツアルコトヲ、十九人委員會ニ告ゲタリ。余ハ此提案ノ條項ヲ委員會ニ通達スル許諾ヲ代表部ヨリ受ケ居ラズ、若シ余ガ斯ク爲セシニ於テハ、其結果ハ日本ノ代表部ト政府トノ間ニ見解ノ相違アルヲ示セルニ過ギザリシナルベシ。

若シ余ノ記憶ニシテ正確ナラバ、貴臺ノ書翰中ニ述ベアル貴臺昨日ノ表言ハ、貴臺トシテハ我々ガ貴臺ニ提示スル様訓令セラレシ十九人委員會ノ提議ヨリモ、代表部ガ東京ニ電報セル新案全部ヲ承諾スル方、日本國政府ニ取り容易ナルベシト考フ、ト云フ感想ヲ述ベラレシモノナリ。

余ハ此感想ニ關シ我々ノ意見ヲ要求セラレシモノトハ考ヘザリキ、議長ニ於テモ同様ナルベシト余ハ思考ス。

余ハ以上ノ記述ガ經過ノ正確ナル表示ナルコトニ、貴臺ニ於テモ同意セラレ、我々ノ間ニ生ジ得ベキ誤解ガ、斯クシテ消散スベキコトヲ確信ス。

帝國政府ノ讓歩

我々ハ、少クモ松岡代表ト筆者ハ、一月十二日杉村公使ヨリ所謂「杉村ドラモンド」案ナルモノノ提示ヲ受ケタ時以來持ツテ居タ懸念ガ、今ヤ現實化シタノヲ見テ、豫期セルコトトハ云ヒナガラ、其厚顔ナト無作法振ヲ頗ル心外ニ感ジタ。右ニモ拘ラズ我々ハ最後迄出來ル限りノ努力ヲ拂フヲ誓ヒ、會及我々ノ提出セル新提案全部ガ本省カラ承認サレタ故、松岡代表ハ二十一日午後一時半議長及事務總長ヲ訪問シテ此事ヲ通報スルト同時ニ、假令米蘇招請條項ガ削除サレテモ、他ノ個條ガ原案其儘デハ、日本國政府トシテ承諾不能ノ所以ヲ繰返シ、縷々説明スル所アツタガ、右ニ引續イテ開カレタ十九人委員會ハ、支那側ノ修正提議ニ鑑ミ、之デハ到底兩當事國ノ受諾可能ナ成案ヲ得ルコトガ出來ヌ、仍テ其任務ハ失敗ニ終ツタト考フルニ付テハ、規

約第十五條第四項ノ豫見スル報告案ノ作成ニ着手スルニ決シタ、尤モ同條第三項ノ手續ハ總會ノ決議アル迄閉鎖セラルベキモノデハ無イカラ、委員會ハ當事國ノ提出スル總ベテノ新提議ヲ接受研究スルノ同意アリ、ト云フ趣旨ノ決議ヲシタ。松岡代表ハ當夜議長及事務總長ヲ訪問シ、最後ノ試ミトシテ、若シ日本ガ夫ノ新案全部ヲ其儘承諾シタ場合、十九人委員會ハ如何ナル態度ヲ執ルデアロウカト質問シタラ、事務總長ハ之ハ假題ニ過ギヌ故回答ノ限リデナイ、ト素氣ナク突刺ネタトノコトダ、ソシテ其時「イマンス」議長ハ、十九人委員會ノ最モ重キヲ置ク點ハ、和協ノ基礎トシテ「リットン」報告書第九章ノ諸原則全部ノ受諾ト理由書最後項ノ維持トデアルト云ツタソウダガ、若シ最初カラ眞實此様ナ氣分デアツタノナラ、話ノ纏マル筈ハ無イノデ、二箇月有餘我々相手ニ交渉シタノハ、全然無意味ニ非ズンバ、我々ヲ愚弄シタモノデアアル。眞相ハ日支双方ノ間ニ挾マツテ十九人委員會ガ手ヲ焼イタ結果、斯ク決心シタモノデアロウガ、松岡代表ハ此會見ヲ終ルニ臨ミ、自分ハ斯クノ如キ結果ヲ極力避ケント希フモノデアアルガ、本日十九人委員會ノ決議當然ノ成行トシテ、日本ハ「左様ナラ」ヲ云ハネバナラヌ羽目ニ置カレタノデハナイカラ虞レルト告ゲタ。

十九人委員會ハ一月二十一日ノ決定實行ノ爲メ、二十三日起草委員會ヲ設ケ、着々歩ヲ進メタカラ、我々ハ之ニ應酬スル爲メ、二十四日今迄ノ主張ト成行ヲ詳細記述シタ「コムミュニケー」ニ、日本ノ出シタ最後案ヲ添ヘテ、之ヲ諸新聞社ニ配布シタ。斯クシテ事態ハ日ト共ニ急迫ヲ告ゲテ來タガ、二月一日帝國政府ハ最後ノ讓歩ニ關スル廟議ヲ決定シタ。其全文ト説明書ハ左ノ通りデアアル。

一、目下問題トシテ殘ル所ハ、結局(イ)理由書第九項及(ロ)和協委員會權限ノ二點ノミナルガ(非聯盟國

招請ノ件ハ當爲削除セラレタルモノト認ム、又其他ノ點ハ最早問題トセズ)

(イ)理由書第九項ハ十二月十五日原案ノ如ク滿洲國不承認ノ趣旨ヲ直接明確ニ記シ、爲メニ帝國ノ對滿政策ヲ正面ヨリ非議シ、日本國民ノ自尊心ヲ傷クル結果トナル記載振ハ、到底容認シ難キモ、右ノ次第ヲ考慮ニ入レテ字句ノ修正ヲ行ヒ、例ヘバ客年三月十一日ノ決議乃至「ドラモンド」杉村新案第九項ノ如キ漠然タル記載振ト爲スニ於テハ、受諾方考慮スベシ。

(ロ)「リットン」報告書十原則ヲ基礎トシテ行動スル和協委員會ノ權限モ、十二月十五日原案ノ如キモノニテハ、到底容認シ難ク、少クトモ十二月十七日起草委員會ヲ通過セル案ノ如ク、現實ノ事態ニ留意シテ、兩當事國間ノ和協ヲ計ルコトヲ趣旨トスルモノナルコトヲ要ス。

二、我方トシテハ以上ノ趣旨ニヨリ誠意ヲ以テ和協ノ爲メ極力努力スル考ナルモ、前記(イ)及(ロ)ハ我方ノ最終的且ツ最少限度ノ要求ナルヲ以テ、聯盟側ニ於テ右ヲシモ受諾シ難シトセバ、我方ハモハヤ讓歩ノ餘地ナク、其結果第四項ノ適用ヲ見ルモ、敢テ之ヲ阻止セントスルモノニ非ズ。

三、將又第四項ノ適用ニ移リタル場合、我方ニ於テ聯盟脫退ノ措置ニ出ヅルヤ否ヤハ、第四項ニ基ク報告及勸告ノ内容ヲ慎重檢討シタル上、自主的ニ之ヲ決定スベシ。

說明書

前記一ノ(イ)ニ關シ。

(一)聯盟ニ於テ第十五條第三項ニ基キ兩當事國間ノ和協ヲ計ルモノナル以上、當事國ノ一方タル帝國政府

ノ滿洲國承認ヲ、正面ヨリ否認スルガ如キ結果トナル記載振ノ不可ナルハ、例ヘバ「滿洲國ヲ承認スベシ」ト記載スルコトガ和協ノ趣旨ニ反スルト同様ナリ。我方ニ於テハ帝國政府ノ滿洲國承認ヲ否認スルガ如キコトヲ記載ス可ラズト主張スルモ、左レバトテ他ノ聯盟國ニ對シ同國ノ承認ヲ勸說スルガ如キコトヲ記載セヨト云フニハアラズシテ、承認スベシトカ又ハ承認ス可ラズトカラ、初メヨリ豫斷スルコトナクシテ、和協ニ臨ムコト、和協ノ性質上當然ナリト爲スニ他ナラズ。

(二)我方ニ於テハ以上ノ主張ガ極メテ公正妥當ナルヲ信ズルモノナルガ、而モ尙ホ(イ)第七原則ヲ包含スル「リットン」報告書十原則ヲ(現今ノ事態ヲ考慮ニ入レツツ)事件處理ノ基礎ト爲スコト、及(ロ)理由書第九項ヲ前記一ノ(イ)位ノ趣旨ニ修正シ、之ヲ存置スルコト等ノ容認スルノ態度ヲ執レルハ(嚴格ニ(一)ノ趣旨ニ從ヘバ、右(イ)(ロ)等ハ元來容認シ難キコトナリ)聯盟首腦部ノ盡力ニ報ヒンガ爲メ、難キヲ忍ビテ特ニ互讓ノ誠意ヲ示シタル次第ナリ。

(三)聯盟側ニテハ理由書(議長宣言ノ形ト爲ス)第九項ノ字句ハ十二月十五日原案ノ儘トシ、之ニ對シ我方ニ於テ留保的聲明ヲ爲セバ可ナルニ非ズヤト主張シ居ル處、右ハ法理論トシテハ兎ニ角、實際的見地ヨリスルニ、聯盟ト我方トハ正面ヨリ相容レザルコトヲ明確ニ揭示シテ和協ニ臨ム譯ニテ(此結果日本國民ノ聯盟及其和協事業ニ對スル反感、著シク高マルベキコト云フ迄モナシ)右ガ和協ノ精神ニ矛盾シ且ツ和協ヲ達成スル所以ニアラザルコトハ何人モ明カナルベシ、之ニ反シ前記ノ如ク第九項ノ辭句ヲ漠然タル形(當方ニ於テハ前記一ノ(イ)ノ通り客年三月十一日決議乃至杉村「ドラモンド」案ノ如キモノトスル

カ、(b)最近貴地等ヨリノ新聞電報ノ傳フル英國案ナルモノ、即チ「日本ハ滿洲國ヲ承認セリ、其他ノ聯盟國ハ未ダ之ヲ承認シ居ラズ」ト單ニ事實ヲ記スルコトトスルガ如キ、又(c)貴電ノ「右ハ……ヲ妨ルモノニアラズ」ノ趣旨ヲ加味シ、原案ヲ適當ニ修正セバ受諾ノ餘地アリト認メ居リ、殊ニ前記(b)英國案ナルモノハ妙ナルヤニ思考シ居レリ)ノモノトスルニ於テハ、我方トシテモ正面ヨリ反駁ヲ加フル必要ナク、折衝ノ裕取リヲ存シテ和協ニ臨ミ得ル譯ニテ、斯クシテ各方面トモ誠意ヲ以テ話合ヒ行クニ於テハ、前記ノ場合ニ比シ和協達成ノ望ミハ遙カニ大ナルベシ、此點ハ聯盟ガ從來ノ行キ懸リニ捕ハレズ冷靜ニ判斷スレバ極メテ明カナル義ト存ス。

(四)將又聯盟側ニハ理由書第九項ヲ十二月十五日原案ノ儘維持セザレバ、支那ハ聯盟ヲ脱退スベシトカ、又ハ日支直接交渉ノ成功至難ナリトカ、考ヘ居ル向モアル模様ナルガ、結局ニ於テ支那側エ聯盟脱退ノ決意ナキコトハ想像ニ難カラズ(數次往電參照)固ヨリ國民政府外交當局乃至支那代表部等ハ種々強ガリヲ云ヒ居ル模様ナルモ、我方ノ有スル信ズベキ情報ニ依レバ、國民政府ノ眞ノ責任者ハ、内心日支間ノ直接交渉ガ紛爭解決ノ唯一ノ方法ナルト共ニ、斯クシテ成ルベク速カニ紛爭ノ解決ヲ持チ來スコトガ、同政府ノ基礎ヲ堅ムル所以ナルヲ自覺シツツ、而モ國論及反對派ノ手前勇敢ニ之ヲ表示スルコトヲ得ズ、聯盟側ノ強制ニ依リ右直接交渉ニ入ラムコトヲ希望シ居ルモノノ如クニテ、右ハ聯盟側トシテ充分考慮ニ入ルベキ點ト存ズ。

(五)叙上ノ次第ハ既ニ貴代表等ニ於テ聯盟側再々御説示相成リタルコトトハ存ズルモ、問題ノ重大性ニ鑑ミ、此際改メテ右趣旨ニ依リ聯盟側ノ説得ヲ計リ、以テ決定廟議ノ目的ヲ達成スル様、最善ノ努力ヲ拂ハレムコトヲ望ム。

以上ノ電報ヲ我々ニ送ツタ其日(二月一日)ニ、内田外相ハ在京英國大使ヲ招イテ、帝國政府決定ノ梗概ヲ内報シタ、我々ハ互ニ手分けシテ各國代表ヲ訪問シ、帝國ノ眞意ヲ徹底セシメ、又極東事態ノ真相ヲ闡明スルニ努メ、二月二日松岡代表先ヅ「ドラモンド」事務總長ト英ノ「イーデン」氏ヲ訪ネ、翌三日ニハ伊太利ハ松岡代表、白耳義ハ佐藤代表、佛蘭西、獨逸、「チエツコスロヴァキヤ」ハ筆者之ヲ受持チ、前記訓令及説明ヲ適宜取捨敷衍シタ覺書ヲ作り、口頭説明ト共ニ之ヲ渡シタガ、此策動ハ既ニ時機ヲ失シテ居ルコトヲ我々ハ能ク自覺シテ居タ。起草委員會案決議其ノ第四項ヲ更ニ修正シタ前掲十二月十八日ノ案ハ「ドラモンド」事務總長ガ筆者ノ意見ニ聽從シタモノデ、我々ハ本項ヲ此程度デ折合、米蘇招請問題ト理由書第九項ニ全力ヲ注グノガ得策ダト心得、此趣旨ノ稟申ヲシタノデアルガ、當時本省ハ非常ナ劍幕デ之ヲ蹴ツタ、我々トシテモ滿洲ノ事柄ニ第三國ノ容喙ヲ許スコトガ帝國ノ國是ニ反スル位ノコトハ夙ニ知悉シテ居ルノデアルカラ、本省ノ言ヒ分ニ反對スル理由ハ毛頭ナイ、唯英佛乃至事務總長ガ折ニ觸レテ表明シタ様ニ、和協委員會ヲ二三年間眠ラセテ、事態ノ推移ヲ傍觀サセルコトガ出來ルナラ、寧ロ此項ハ是レ位ニシテ置ク方ガ善イト思ツタ丈ケデアルガ、本省ハ非常ニ強硬ダツタカラ、我々ハ飽迄此意氣デ押通スモノト心得、之ニ共鳴シタノデアル。然ルニ最後ノ瞬間ニ腰ガ折レテハ、徒ラニ聯盟ヲ増長サセル丈ケデ、到底帝國ノ豫期スル結果ヲ收メ得ル見込ハ無イカラ、斷然輸贏ヲ一舉ニ決スベキダト思フタガ、残念ナコトニハ未ダ確固タル聯盟對策

ヲ帝國政府ハ持ツテ居ラス、之ハ我々ノ照電ニ對スル左記二月二日內田外相ノ返事ガ雄辯ニ物語ル所デ末尾「脱退ノ決意ヲ有スルコトハ申ス迄モナキ義ナリ」ノ一句ガ、單ニ體裁上附ケ加ヘラレタモノダト云フコトハ、何人ニモ一目瞭然デアアル。

我方最善ノ努力ニ拘ラズ、終ニ規約第十五條第四項ニ移ル外ナキ場合、同項ニ依ル報告及勸告ガ、第三項ニ依ル決議及議長宣言ヨリモ、我方ニ不利ナルコトアルベキハ當方ニテモ固ヨリ豫想シ居ル所ナルガ、第三項ノ場合ニハ我方ニ於テ聯盟ガ滿洲國不承認ノ原則ヲ明言スルコトヲ留保の宣言ヲ條件トシテ承認シタリトノ印象ヲ貽スニ反シ、第四項ノ場合ニハ我方ハ飽迄反對ノ建前ニテ押通シタルコトナリ、其結果我國民並ニ支那側及滿洲國等ニ與フル政治的影響ニ差異アリ、從ツテ第四項ニ依リ報告及勸告ガ第三項ノ場合ト同様ナルカ、又ハ多少不利ナル點アリトスルモ、當然ニ脱退ヲ敢行セザル可ラザルコトハナラザルベク、我方トシテハ堂々ト我所見ヲ開陳シテ、結局彼我何レノ見方ガ正シキヤ、時ノ判斷ニ俟ツコトヲ得ベシ、要スルニ脱退カ否カハ報告及勸告ノ内容ヲ慎重ニ檢討シタル後決定スベキモノト存ス、而シテ最惡ノ場合政府ニ於テ脱退ノ決意ヲ有スルコトハ申ス迄モナキ義ナリ。

終 幕

我方ノ讓步案ヲ審議シタ二月四日ノ十九人委員會ハ、果シテ之ヲ一蹴シ、非聯盟國ノ招請ヲ除ク原案其儘ノ承認ヲ要求スルト同時ニ、規約第十五條第四項ノ報告起草ガ着々進行シ居ル旨ノ「コムミュニケー」ヲ公表

シ事務總長ハ即日松岡代表ノ來訪ヲ求メテ、以上ヲ通告スルト共ニ、若シ日本ノ主張スルガ如ク根本問題ヲ有邪無邪ニシテ和協委員會ニ移レバ、滿洲國存否ノ件ハ直ニ同委員會ノ問題ト成ルカラ、委員會ハ幾何モナク解體シ、事件ハ再ビ聯盟總會ニ逆戻リスル故、斯クノ如キ手續ヲ承認スル何人モ十九人委員會ニハ居ラヌト述べ、氏ガ屢々口ニシタ二三年間和協委員會ヲ眠ラシテ置クト云フ考案ハ、單ニ之ヲ口ニセヌミカ、全然無視忘却ノ態度ニ出タ、ソシテ支那側ハ十九人委員會ノ此氣分ニ油ヲ注グ爲メ、米蘇招請條項ノ削除ニ絶對ニ反對ノ聲明ヲ發シタ。

筆者ハ帝國ガ聯盟ニ留マツテ認識不足、否認識皆無ノ多衆ヲ相手ニ、實益ナキ空論ノ對象トナリ、無用ノ干渉ヲ受クルヨリモ、早キニ及ンデ之ト絶縁スルノガ、帝國ノ爲メ、廣クシテハ東亞全局ノ爲メ、最善ノ方法ト考ヘ、昭和七年春既ニ卑見ヲ上申シタガ、今ヤ帝國ガ讓レバ讓ル程聯盟ハ附ケ上ガリ、ヨシ曲リナリニ和協委員會ヲ作ツテモ、最近ノ形勢デハ委員會ニ於ケル行程ハ頗ル明カデ、結局破綻ヲ免レヌカラ、餘計ナ苦勞ヲシテ惡宣傳ノ的トナルノハ如何ニモ馬鹿ラシク、筆者ノ信念ハ日ト共ニ益々堅キヲ加フルニ至ツタ。然シ政府ノ腹ヲ固メサセル爲メニハ、今迄ノ經驗上、最後ノドン詰迄事態ヲ押進メル必要ガアル、仍テ杉村公使ニ依頼シ更ニ事務總長ト協議シテ、二月四日新案ヲ作り之ヲ東京ニ電報シタラ、帝國政府ハ同意シタカラ二月七日及八日我々ハ又手分ケシテ目星シキ代表ヲ訪ヅレ、左記ノ説明書ニ添ヘテ新案ヲ交付シタ。

新案ハ杉村氏ガ事務總長ト交渉ノ上作成スルモノニテ、日本代表部亦之ニ同意ス。十九人委員會ノ原案ニ加ヘタル總ベテノ修正ハ「リットン」報告書ノ記載其儘ヲ引用セルニ過ギザルコトヲ注意セラレタシ。

日本國政府ハ代表部ト十九人委員會トノ間ニ行ハレタル交渉中、多大ノ讓歩ヲ爲セリ、即チ

(イ) 滿洲事件ニ規約第十五條ヲ適用スルコトニ、日本國政府ハ反對シ來レルガ、此條項ニ基ヅク手續ヲ今ヤ承認ス。

(ロ) 九國條約ノ引用ニ反對スル充分ノ理由アリト雖モ、日本國政府ハ今ヤ同條約ヲ決議中ニ引用スルコトヲ承諾ス。

(ハ) 日本國政府ハ一九三二年三月十一日ノ決議ニ對シ、總會ニ於テ爲シタル留保ニ拘ラズ、此總會決議ヲ決議中ニ記入スルニ同意ス。

(ニ) 日本國政府ハ其反駁意見書ニ於テ「リットン」報告書第九章ニ掲ゲラレタル十原則ニ對シ不承諾ヲ表明セルガ、事件解決ノ基礎中ニ之ヲ加フルコトヲ承認ス。

(ホ) 日本國政府ハ和協委員會ガ極東ニ利害ヲ有スル列強ノ代表者ノミニ依リテ構成サレンコトヲ主張セルガ、該委員會ニ十九人委員會ノ委員ヲ任命スルコトニ同意スルノ準備アリ。

(ヘ) 日本國政府ハ議長宣言第九項ノ實體ガ殘留スルヲ拒マズ。

之ヲ要スルニ諸原則ニ關スル限り、日本國政府ハ十二月十五日十九人委員會ノ總ベテノ要點ヲ承諾シ、殘ルハ和協ニ到達スル爲メ之ヲ如何ニ適用スルカノ問題ノミナリ。

滿洲ニ於ケル平和ト治安ノ維持及同地ニ於ケル日本ノ權益保護ハ、日本國政府ノ重大關心ヲ有スル所ナルニ付、之ニ關シテハ如何ナル讓歩ヲモ爲スコト不可能ナリ。支那現在ノ不秩序狀態ニ鑑ミ、滿洲ニ支那ノ

主權ヲ恢復スルコトハ、其權利ノ濫用ヲ肆ママニスルノ好機ヲ支那人ニ與フルニ等シカルベシ、即チ一九三一年九月十八日ノ事變以前ニ發生セルガ如キ事件ノ再發ヲ見ルコト不可避ニシテ、滿洲ニ於ケル日本ノ地位ハ再ビ重大ナル脅威ヲ感ズニ至ルベシ。

斯クノ如キ特殊ノ事態下ニ於ケル日本ノ疑懼、ハ和協手續開始セラレ、和協委員會ノ審議始マルモ直ニ充分認識セラレ且ツ了解セラルベキヲ豫期ス。

規約第十五條第四項ノ手續ニ基キテ爲サルベキ勸告ハ、日本國民ニ依リ受諾サルル望ミ極メテ少ナク、アリ得ベキ拒絕ニ引續ク事態ノ進展ハ、殆ンド之ヲ豫見シ得ベシ。斯クノ如キハ聯盟ニトリ亦日本ニトリ解決タルヲ得ズ。

新案ト十二月十五日原案トノ對照

決 議 案 其 一

第一、二、三項 原案ノ儘。

第四項 十九人委員會ハ調査委員會報告書第九章ニ掲ゲラレタル原則及結論ヲ基礎トシ「之ヲ起生セル事

態ト調和セシメ」(報告書一四三頁) 解決ヲ計ル爲メ當事國ト(以下原案ニ同ジ)

第五、六項 削除。

第七、八、九、十項 原案ノ儘。

決 議 案 其 二

杉村「ドラモンド」案其儘。

十九人委員會議長宣言案

第一項 原案ノ儘

第二項 「右記述ニ必要ナル一切ノ資料ハ」以下ヲ左ノ如ク改ム。

平和維持ニ關スル聯盟ノ努力ニ至高ノ貢獻ヲ爲セル調査委員會報告書ノ最初ノ八章中ニ之ヲ發見スルヲ得ベシ。

第三、四項 原案ノ儘

第五項ノ末段及第六項（非聯盟國招請關係）削除。

第七項 原案ノ儘

第八項 「次デ考慮セラルベキ解決ニ關シテハ」以下ヲ左ノ如ク改ム。

決議第四項ニ從ヒ調査委員會報告書第九章ニ掲ゲラレタル原則及結論ヲ基礎トシ、之ヲ起生セル事態ト調和セシメ、解決ヲ求ムベキモノトス。

第九項 右ニ關シ十九人委員會ハ日本ガ滿洲ニ設ケラレタル現制度ヲ承認シ、其他ノ聯盟國ハ之ヲ爲サザリシコトヲ認ム。

調査委員會報告書ハ總會ガ解決交渉ノ基礎トシテ決議第四項ニ採用シタル原則及結論ヲ其第九章ニ記載シ居ルコト、單ニ一九三一年九月前ノ狀態ニ復歸スルハ恒久的解決ヲ保障スルニ十分ナラザルコト、又

滿洲ニ於ケル現制度ノ維持及承認モ解決ト看做シ得ザルコト、及將來ニ對スル滿足スベキ制度ハ如何ナル急激ノ變更ヲモ加フルコトナク現制度ヨリ展開シ得ベキコト（報告書一三〇頁）ニ留意スルヲ要ス。

此日本ノ穩健ナ態度、否屈辱の讓歩ニ對シ、十九人委員會ハ如何ニ報ヒタカ、試ミニ左記要譯ノ同委員會二月九日ノ「コムミニケイ」ヲ讀ンデ貫ヒタイ。

十九人委員會ハ日本ノ新提案ヲ本朝審議セリ。同案正確ノ意義ニ付問題起リ、誤解ノ起生ヲ妨止スル爲メ委員會ハ調査委員會報告書第九章ノ第七原則ニ關シ、其態度ヲ闡明センコトヲ要求スル書翰ヲ日本代表部ニ送ルニ決シタリ。第七原則トハ左ノ如シ。

七、滿洲ノ自治

滿洲ノ政府ハ支那ノ主權及行政的保全ト併立シ得ル態様ニテ、地方ノ狀況ト東三省ノ特殊性ニ適應スル廣汎ナル自治ノ保障スル様、變更セラレザル可ラズ、云々

同時ニ事務總長ハ、假令之ヲ無用トセザル迄モ和協ノ努力ヲ危殆ナラシメ、事態ヲ擴大スルモノト十九人委員會ノ考フル、軍事的準備及行動ノ繼續ニ關スル情報ニ付、日本代表部ノ注意ヲ口頭ニテ喚起スル様、委囑セラレタリ。

起草委員會ハ本日午後參集シ、規約第十五條第四項ニ依ル勸告ニ關スル討議ヲ續行スベシ。

聞ケバ此考案ハ、十九人委員會デ専ラ英國ノ「イーデン」氏ニヨリ強調サレタトノコトデアルガ、之ハ多分國際管理ノ腹案ガ思フ様ニ成ラヌ爲メ、滿洲問題ノ善後處置ニ關心ヲ持タナクナリ、又米國ノ和協委員會參

加モ見込ガ無クナツタト同時ニ、該委員會ヲ無爲ニ眠ラセテ置クコトハ到底形勢ガ許サヌカラ、英國ハ單獨矢面テニ立ツ危險ヲ感ジ、寧ロ同委員會ノ成立ヲ邪魔シタ方ガ得策ダトノ考ヲ起シタ爲メデハアルマイカ。何レニセヨ「ドラモンド」事務總長ハ二月九日前記「コムミスニケ」中報告書第七原則ノ件ヲ敷衍シタ書翰ヲ松岡代表ニ送り、其回答ヲ求メタガ、事務總長ハ更ニ同代表ヲ招キ「コムミニケ」後段ノ要點ヲ果シタ。會談要領ハ左記報告電報ノ通りデアル。

一、事務總長ハ十九人委員會ハ諸情報ニ依リ近ク熱河ニ於テ大規模ノ戰闘開始セラルル氣配ナルコトヲ懸念シ居ルガ、若シ此懸念ニシテ誤ラザランカ、和協ハ不可能トナルベキヲ虞ルルヲ以テ、此點ニ付自分ニ於テ日本代表部ト話合フベキコトヲ委託シタリト述ベタルニヨリ、熱河ノ情勢ニ付テハ周知ノ如ク日本側乃至滿洲國側ニ於テハ何等挑發的態度ヲ執リタルコトナキニ、支那側ハ大軍ヲ集中シ、滿洲國側ガ平和的解決ニ努メタルニ拘ラズ南滿ノ中部ヲ脅カス開魯邊迄モ進出シ居ル實情ナルガ、熱河ハ滿洲國建國以來其領土ノ一部分ヲ成セルヲ以テ、同國ガ之ヲ回復シテ脅威ヲ除キ安全ヲ確保セントスルハ當然ノコトニシテ日本ハ同國ト議定書ヲ締結シ居ル關係上之ヲ援助スル義務アル次第ナルモ、日本ハ決シテ同方面ニ於テ戰爭ヲ欲スルモノニアラズト説明シタルニ、事務總長ハ然ラバ支那兵ガ南滿中部ニ脅威ヲ與フルガ如キ地點ヲ引揚ゲ、承德邊ニ集中スレバ日本側ハ満足スベキヤト問ヘルニヨリ、松岡ハ承德附近ニ在ル兵ハ直ニ奉天省境ニ送ラレ得ベキヲ以テ熱河省外ニ撤退スルコトノ必要ヲ説明シ、尙ホ支那側ハ熱河ニ對スル主權ヲ拋棄シタルコトナキヲ以テ同省内ニ駐兵スルコト自由ナリト云フナランモ、斯カル議論ハ實情ヲ無視セル

「セオリ」ニシテ、聯盟ガ同地方ニ平和ヲ確保センガ爲メノ唯一ノ實際的方途ハ、支那ヲ説得シテ省境外ニ撤兵セシムルニ在ルコトヲ指摘シ、尙ホ熱河問題ノ據テ來ルトコロハ、實ニ表面口ニスル失地回復ト云フガ如キ愛國の動機ニ出ルモノナラズシテ、全ク内政上ノ複雑ナル陰謀術策ノ產物ナルコトヲ篤ト説明シ置キタリ。

二、事務總長來翰ニ付キテハ松岡ニ於テ進ンデ意見ヲ表示スルコトヲ避ケタルニ「ドラモンド」之ニ言及シタルヲ以テ、松岡ハ自分ハ十九人委員會ガ斯クノ如キ書翰ヲ送致シ來レル眞意ヲ了解シ得ズ、日本ハ滿洲國承認ニ付テハ一步モ譲リ得ザルコトヲ最初ヨリ明カニシ來リ、理事會ハ充分此日本ノ態度ヲ知リナガラ尙ホ第十五條第三項ニヨリ解決ヲ試ムベク問題ヲ總會ニ回附シタルニ非ズヤト反問シタルニ、事務總長ハ此點ハ明瞭ニナリ居ラズ、孰レニセヨ日本ノ最後案ノ意義ヲ明瞭ナラシムル爲メ質問ヲ發セザルヲ得ザルニ至レリト述ベタルニ依リ、松岡ハ少クトモ「ドラモンド」「イーデン」「ベネシュ」等ニ於テハ、日本國政府ハ和協委員會ノ成立ヲ圖ル爲メニ「リットン」報告書十原則ヲ決議中ニ掲グルコトニ異議ヲ挿ムモノニ非ザルモ、委員會成立ノ曉同委員會ニ於テ第七原則又ハ滿洲國獨立承認ノ問題提起セラレタル場合ニハ、充分ニ議論ヲ盡シ、日本國政府ノ政策ガ唯一ノ解決案ナルコトヲ承服セシムルノ意嚮ナルコトヲ承知シ居ル筈ナルニ、今之ヲ問題トシテ日本ノ確答ヲ求メラルルニ於テハ、聯盟ハ日本ヲ強要シテ和協ヲ失敗ニ終ラシムルモノト評セラルルモ致方ナカルベシト述ベタリ。尙ホ松岡ハ滿洲ノ自治ヲ云爲スル連中ハ、支那ノ主權ガ滿洲ニ及ブコトヲ前提トスルモノト察ラルルガ、果シテ爲ラバ聯盟ヨリ支那ニ對シテ其領土

ノ一部ニ行ハルベキ統治ノ形式ヲ指示スルモノニシテ、取りモ直サズ内政干涉ナリ、我方ノ承認ハ住民ノ意思ニヨル獨立ノ事態ヲ確認シタルモノニシテ、之ハ全ク趣ヲ異ニセリ、日本ハ一貫シテ對支内政干涉ニ反對シ來レル主義上ノ見地ヨリモ斯克ノ如キ主張ニ同意スルヲ得ザルコトヲ指摘シタルニ、事務總長ハ元來滿洲問題ハ支那ガ聯盟ニ提訴シ來レルモノナルニ依リ、内政干涉ニアラズト考フル旨述べタルニヨリ、松岡ハ支那ノ求ムルトコハロ斯克ノ如キ内政干涉ニアラズ、日支間ノ紛争ニ付訴ヘタルノミ、然ルニ若シ之ヲキツカケニ聯盟ガ内政干涉ヲ行フノ端ヲ開クニ於テハ、將來外蒙、新疆、西藏等ニ付問題起リタル場合、一々統治ノ形式ヲ決シ之ニ干涉セラルベキヤ、左様ノコトハ事實不可能ナリ、然ルニ滿洲ニ關シテ苟モカカル干涉ヲ敢テセラルカラニハ、理論トシテ右ノ如キ不可能事ヲ試ミラザル可カラズ、斯克考ヘ來レバ實ニ「アブサード」ナルコトニ氣附カレザルヤト反駁シ置キタリ。終リニ松岡ヨリ之ヲ要スルニ折角回答案文ニ付考量中ナル處、結局承認ヲ基調トスル日本國政府ノ立場ヲ指摘スルノ外ナカルベク、サスレバ十九人委員會ハ和協不成立ト看做サル考ナリヤト問ヒタルニ、事務總長ハ然カ考フト答ヘタリ。而シテ二月九日事務總長來翰ニ對シ、松岡代表ハ二月十四日左記要領ノ回答ヲ送ツタ。

貴臺ノ提起セラルル點ハ、日本國政府ガ累次明確ニ聲明セル所ニシテ、又余自身モ貴臺ノミナラズ十九人委員會議長、理事會及總會ニ、口頭又ハ文書ニテ充分説明セルモノニ係ル。

余ハ日本國政府ガ滿洲國ノ承認ニ關シ徒ラニ論議ヲ戰ハスヲ欲セザルト同時ニ、充分説明ヲ爲ス機會アルニ於テハ、其行動ノ正當ニシテ非難サルベキモノニ非ザルコトヲ、世界ニ了解セシメ得ル確信ヲ有スルコ

トヲ強調シタリ、余ハ此會談ノ要領ガ十九人委員會ニ通報セラレタリト聞キ、之ニ關スル我方ノ態度ニ對シ同委員會ニ毫モ誤解ナキモノト思ヒ居タリ。

十九人委員會ガ非聯盟國招請條項ヲ削除スルニ同意シ、其他ノ原案全部ニ對スル同意ヲ求メシ際、貴臺及議長ハ一月十八日余ニ對シテ、議長宣言案ノ最後項ニ付テハ日本ノ態度ヲ表明スル宣言又ハ留保ヲ爲セバ可ナラズヤト提言セシコトヲ記憶セラルベシ。

若シ當時日本ガ此提言ニ聞ケバ、十九人委員會ハ之ニ異議ナカリシモノト余ハ了解ス。此提言ハ今貴臺ノ書翰ニ於テ提起セラレシ問題ニ付十九人委員會ガ日本ノ態度ヲ判然理解シ居ラザルニ於テハ、決シテ爲サレザリシモノナリ、而シテ此提言ハ單ニ貴臺等ニヨリテ爲サレシノミナラズ、二月四日ノ公式「コムミヌニケー」ヲ以テ確認セラレタリ。

日本國政府ハ調査委員會報告書第九章ノ諸原則ヲ決議案及宣言案ニ包容スルニ異議ナシト雖モ、右ハ事態ノ現狀ヲ充分ニ考量シ、且ツ和協其モノノ必然性タルベキ偏見除去ノ精神ニ則リ、是等諸原則ガ適用セラレベキヲ前提トス。

斯克ノ如キ妥協的態度ヲ執ル日本國政府ハ、十九人委員會ガ本件ニ關スル日本ノ立場ヲ充分了解シ居ルモノト假定シテノ上ナルコト勿論ナリ、換言スレバ滿洲國ノ維持及承認ハ極東平和ノ唯一ノ保障ニシテ、全懸案ハ結局此基礎ニ於テ日支兩國間ニ解決セラレベキコトヲ日本國政府ハ確信ス。

事務總長ハ右ニ對シ即日最後通牒の書翰ヲ送致シタ、其要領ハ日本側ガ滿洲現制度ノ維持及承認ヲ以テ事件

解決ノ要訣ニ非ズト思考スル調査委員會ノ提言ニ聽從スル意思ナキ限り、十九人委員會ハ日本ノ新案ヲ和協ノ基礎トシテ採用スルコトガ出來ヌ、尤モ總會ノ最終會合ガ行ハルル日迄、日本國政府カラ今後提出セラルル各案ハ十九人委員會デ慎重審議サレルダロウト云フニアル。之ハ言葉ヲ換ヘタ降服要求デ、如何ニ姑息ナ政府デモ、又歐米ニ虐セラレテ居タ時ノ日本シカ頭ニ無イ古カラノ杞憂的助言ガアツタニシテモ、最早斷乎タル決意ヲ爲スベキ時ガ來タト確信シ、我々ハ此趣旨ノ電報ヲ待ツテ居タガ、一向ニ入電ガ無イノデ、二月十五日左ノ激勵電報ニ通ヲ發シタ。

當地形勢ノ推移ハ累次ノ電報ニ依リ既ニ御承知ノ通りニシテ、總會ニ提出スベキ報告案亦大體前電ヲ骨子トスル成案ヲ得タル趣ナルヲ以テ、結局我方ニ於テ受諾シ得ザルモノタルベキハ想像ニ難カラズ、斯カル形勢ニ對應スベキ方策ニ付テハ、政府ニ於テモ充分議ヲ凝ラシ居ラルルコトハ推察スルモ、當方各般ノ情勢ヲ綜合考按スルニ、愈々總會ニ於テ右報告案採擇セラレントスル場合、我方トシテ單ニ代表部引揚ノ如キ姑息ノ手段ハ、此際斷ジテ執ルベキニ非ズト確信ス、尙ホ代表部丈ケ引揚タル場合、之ヲ引留メ若クハ近キ將來ニ於テ復歸ヲ促ガス者出ヅベシ等トハ思ヒモ寄ラズ、又場合ハ聊カ異ルモ巴里講和會議ノ際伊國代表部引揚ノ醜態ヲ御追憶ナラバ思ヒ半バニ過グルモノアラン、右申上グル迄モナキ儀トハ存スルモ、政府ト本代表等トノ間ニ愈々ノ場合萬一行違ニテモ生ジテハトノ老婆心ヨリ、卑見重ネテ此機會ニ於テ爲念電稟ス大至急 前電發送後當地本邦通信員ノ接受セル東京電報ニ依レバ、帝國政府ノ採ルベキ態度ニ關シ種々取沙汰セラレ居リ、事態誠ニ憂慮ニ堪ヘザルモノアル處、從來我方ノ執リ來タル態度ニモ鑑ミ、事茲ニ

至リタル以上、何等遲疑スル所ナク、斷然脫退ノ處置ヲ執ルニ非ズンバ、外間ノ嘲笑ヲ招クニ過ギズト確信ス、右前電ノ補足旁申進ス。

右ニ對シ政府ハ二月十七日左ノ如ク一應ノ回答ヲシタ。

一、貴電報告書案ガ總會ニ依リ採擇セラルル場合ニハ、政府ハ帝國ト聯盟トノ關係ニ付最終的決定ヲ爲スノ要アルベキ處、愈々脫退ヲ實行スルコトナル場合ニハ、憲法上必要ノ手續(樞府御諮詢等)ヲ執ルヲ要スル次第ナルニ付、我方ニ於テハ差當リ前記採用ニ對シ反對ノ投票ヲ爲シタル上、直ニ代表ノ引揚ヲ爲スモノト御承知置キアリタシ。

二、尤モ右引揚ガ總會ノ閉會ニ伴フ當然ノ引揚ト同一視セラルルニ於テハ、其政治的效果面白カラザルニ付、前記反對投票ニ當リテハ單純ナル引揚ニアラザルコトヲ示ス趣旨ノ適當ノ聲明ヲ爲スコトニ致シタシ帝國政府ハ二月二十日愈々廟議ヲ決シ、最後ノ腹ヲ極メタ其電報ハ左ノ通りデアル。

一、帝國政府ハ二月一日閣議決定ノ結果、臨時總會ニ對スル帝國代表ニ對シ、同總會ガ規約第十五條第四項ノ適用ニ移リタル場合、我方ニ於テ聯盟脫退ノ措置ニ出ヅルヤ否ヤハ、同項ニ基ク報告書ノ内容ヲ慎重檢討シシタル上、自主的ニ之ヲ決定スベキコトヲ電訓セル次第アリ。

二、然ルニ今般聯盟側ノ提示シ來レル報告書案ニ依レバ、帝國代表ノ努力ニ拘ラズ我對滿方針ト相容レザル所述並ニ勸告ヲ爲シ居ル處、我方トシテハ聯盟ノ態度如何ニ拘ラズ既定ノ方針ヲ遂行セザルヲ得ズ、從ツテ總會ニ於テ該報告書案ノ採擇ヲ見ル場合ニハ、帝國政府トシテハ帝國ト聯盟トノ關係ニ付聯盟脫退ノ

方針ヲ定メ、帝國憲法上ノ手續ヲ執ルノ要アルニ付、我方トシテハ差當リ左記手順ニ依リ臨時總會ニ對スル帝國代表ノ引揚ヲ行フト共ニ、總會ノ採擇セル報告書ニ對シ第十五條第五項ニ基ク陳述書ヲ公表スベシ。

(イ) 引揚ノ時機ハ總會ニ於テ我方ノ立場ヲ宣明スル聲明ヲ爲シ、且報告書ノ採擇ニ對シ反對投票ヲ爲シタル上、即時之ヲ行フコト。

(ロ) 前記引揚ハ臨時總會閉會ニ伴フ當然ノ引揚ト同一視セラルルニ於テハ、其政治的效果面白カラザルニ付、前項聲明中ニハ「總會ノ採擇セル報告書ハ我方ノ承認シ得ザルモノニシテ、茲ニ帝國政府ハ日支紛爭事件ニ關シ聯盟ト協力シ得ル限度ニ達シタルモノト認ムルト共ニ、帝國ト聯盟トハ東洋平和ノ確立ニ關スル所信ヲ異ニセルコトヲ體得セリ」等ノ趣旨ヲ明示スルコト。

三、尙ホ愈々聯盟脫退ノ場合ニハ、之ニ伴フ内外機微ノ情勢ニ對シ特ニ慎重ノ考慮ヲ拂ヒ善處スルヲ要スルヲ以テ、既定ノ對滿方針ニ邁進スル一方、對支、對露其他歐米諸國トノ關係ニ於テハ努メテ公正ノ態度ヲ持シ、嚴ニ事端ノ發生ヲ避クルト共ニ、一般の平和事業ニハ引續キ誠意ヲ以テ參與スルノ方針ヲ執リ、以テ脫退ニ伴フ内外ノ不安ヲ緩和スルニ努ムベク、而シテ右趣旨ヲ内外ニ徹底セシムル爲メ、嚴肅ニシテ適切ナル手段ヲ講ズベシ。

斯クノ如クシテ聯盟トノ關係ハ遂ニ決裂シタ、總會ニ於ケル經過ハ周知ノコト故之ヲ省略スルガ、我々ガ總會ヲ引揚タ二月二十四日ハ、筆者ガ去年日本ヲ立ツタ當日デ、滿一周年ノ今日聯盟ト絶縁スルニ至ツタノハ誠ニ奇縁デアアル。

第十六章 日本聯盟脫退後ノ佛國ノ對日空氣

反日家「コメール」

昭和八年二月二十五日松岡代表ハ晝、筆者ハ夜ノ汽車デ壽府出發、巴里ニ歸ツタガ、佛國ノ「ボンクール」内閣ハ極メテ短命デ、一月三十一日「ダラヂェー」氏之ニ代ツタ、然シ「ボ」氏ハ依然トシテ外相ノ椅子ニ留マリ偶々同省ノ情報部長ガ病沒シタノデ、其後任ニ反日家「コメール」氏ヲ迎ヘ氏ノ爲メニ情報部ノ規模ヲ擴張シタ。「コメール」氏ハ熱河問題ニ付テモ又東支鐵道問題ニ付テモ、故意ニ事態ヲ誇張シタ惡宣傳ヲ爲シ、反日氣流ノ助成ニ努メタガ、五月九日ノ「ル・タン」紙社説ハ東支鐵道問題ニ關聯シテ日本ノ野心ヲ強調シ、西比利亞殊ニ浦鹽ノ將來ニ對シテ極端ナ悲觀意見ヲ書キ立テタ、其内容ハ兩三日前筆者ガ「コメール」氏ノ頻リニ流布シ居ル所ナリト内聞シタモノト殆ンド同ジデ「ル・タン」ノ如キ大新聞ガ此様ナコトヲ書クト、佛國ノ知識階級ニ迄錯覺ヲ起サセル虞ガ萬々アルシ、又間接ニ「コ」氏ノ反省ヲ促ガス一助トモ成ルト考ヘタカラ「ル・タン」社ニ對シテ嚴談シタラ、編輯主任カラ夫ノ論說ハ自分ガ目ヲ通サナカッタモノデ誠ニ申譯ガナイ、論說主任ノ「ローラン・ド・マレーヌ」氏ニハ篤ト申聞ケ、同人ハ「コメール」氏トハ昵懇ノ間柄デアアルガ、今後日本關係ノ事項ニ付テハ決シテ「コ」氏ノ意見ヲ受ケ賣リセヌ様、嚴重ニ警告シタトノ釋明ニ接シタ。「ローラン・ド・マレーヌ」氏ハ白耳義人デ、日露戰爭時代ニハ白國ノ新聞社ニ居リ、隨